

マッカーシズムと太平洋問題調査会に 関する研究序説

山岡道男[†]

A Preliminary Study on McCarthyism and the Institute of Pacific Relations

Michio Yamaoka

As a research into relationship between McCarthyism and the Institute of Pacific Relations (IPR), this paper focuses, firstly, on what kind of articles appeared in US newspapers in relation to persons concerned with the IPR in the 1950s when McCarthyism was at the peak, so as to understand the political situation of the IPR at that time. Through this research, the author identified the names of IPR members and the related persons in them, such as Owen Lattimore, William Holland, Frederick Field, Philip Jessup, Joseph Barnes, John Fairbank, and John Service.

Secondly, the author describes a life of Saburo Kugai, who edited and published many books among which the IPR related articles were included. He was the prince of McCarthyism researcher in Japan and had kept a close relationship with the Japanese IPR members (Yusuke Tsurumi, Shigeto Tsuru, and Yoko Matsuoka) during and after World War II.

Finally, the author searches books of McCarthyism in Japan as well as those of Kugai. In this research process, the author found that there were very few publications on McCarthyism but those of the red purge in Hollywood in the late 1940s. At the same time, the author refers to some books and academic papers directly related with the IPR and McCarthyism. A research into the disbandment of the IPR is not confined to a description of the past event, but has a possibility of rewriting a history with new documents of Venona project (the joint project of the US and UK intelligence agencies to decrypt coded messages of KGB).

はじめに

早稲田大学太平洋問題調査会研究所（プロジェクト研究所：2006年4月～2011年3月）¹は、2010年12月4日に、「マッカーシズムと太平洋問題調査会」というテーマで、太平洋問題調査会研究の世界的な中心人物であるハワイ大学アメリカ研究科のポール・F・フーパー（Paul F. Hooper）名誉教授を早稲田大学へ招聘して、国際シンポジウムを開催した。その会議録は、シンポジウムと同じ『マッカーシズムと太平洋問題調査会』という題名で、同研究所より翌年の3月に出版された²。報告者は、フーパー教授と私の2名であり、フーパー教授は、「マッカーシズムと太平洋問題調査会研究の現状（McCarthyism and Contemporary IPR Research）」というテーマで、また私は、「日本におけるマッカーシズム研究とマッカーシズム期の太平洋問題調査会研究」というテーマで報告をし、それに対して、マッカーシズムと太平洋問題調査会に関して論文を多く執筆している佐々木豊教授（京

[†] 早稲田大学アジア太平洋研究科教授, Professor, Graduate School of Asia-Pacific Studies, Waseda University

都外国語大学外国語学部)がフーパー教授の報告にコメントをし、また日本で太平洋問題調査研究を共同で推し進めている片桐庸夫教授(群馬県立大学国際コミュニケーション学部)が、私の報告にコメントをした³。

その後も、太平洋問題調査会とマッカーシズムに関する研究を進めたので、2011年7月2日と3日に文教大学国際学部(神奈川県茅ヶ崎市)で開催予定の日本国際文化学会第10回全国大会で、『太平洋問題調査会とマッカーシズム』という共通論題の下に、佐々木教授が「“Conspiracy So Immense”再考——ヴェノナ文書によって惹起された米国におけるマッカーシズムの再評価をめぐる論争と太平洋問題調査会」というテーマで、また私は、上記と同じテーマで報告をする予定であった。しかし、同年3月11日の東日本大震災により開催場所が急遽沖縄県の名桜大学国際学部(沖縄県名護市)に変更され、日程的に参加が不可能となったために、佐々木教授の報告は現在に至るまで実施されていない。私の方は、本年7月7日に、青山学院大学総合文化政策学部(東京都渋谷区)で開催された第11回全国大会で、片桐庸夫教授の司会の下に、山内晴子さん(早稲田大学アジア太平洋研究センター招聘センター員)が「埴原正直と朝河貫一の外交政策の比較」というテーマで、また私は上記と同様のテーマで報告をした。第3番目に「ヘレン・ミアーズの日本論」というテーマで報告を予定していた福井七子教授(関西大学外国語教育研究機構)は、公務の都合で参加できなかった。そこで本稿では、私が国際シンポジウムや学会で報告した内容を記したい。

1. 『ヒステリー・エージ——シカゴ新報 1949-1952 より』からの引用

1980年に米国で出版された『ハリウッドの密告者——1950年代のアメリカの異端裁判(Naming Names)』という本の邦訳版を購入した。2008年9月に出版されたばかりの最新本で、692頁と分厚いが、原本は、まだソ連が存在していた約30年前に執筆されたものである。そのために、1991年のソ連崩壊後に明らかとなったKGB文書や、米国側のヴェノナ(ソ連暗号解読プロジェクト)文書の利用がないので、どこまで実態を分析できているかは、まだ全てを読んでいないので不明である。その最後に掲載されている「訳者あとがき」で、日本でのマッカーシズム関係の出版物に関して解説がなされていた。その中で、日本におけるマッカーシズム関係の第一人者とした名前が挙げられていたのは陸井三郎(2000年1月13日死去、81歳)であったので、同氏の『ハリウッドとマッカーシズム』を本棚から取り出し、その「あとがき——A Bibliographical Essay もかねて」を読んでみると、同氏が1952年に、当時の米国で日英両言語により発刊されていた『シカゴ新報』紙の記事をテーマ別に編集した『ヒステリー・エージ』という本を出版していたのが分かったので、インターネットの古書サイトから入手することにした。

この本の中には、「太平洋問題調査会」という言葉も出ており、またオーウェン・ラティモア関係の訴追記事も載せられていた。その内容を読むと、新聞記事の寄せ集めなので、当時の雰囲気は良く分かった。そこで、太平洋問題調査会に関する関連記事を転記し、読みやすく編集した上で、ここに再記する⁴。(2008年10月5日記)

その1 ピアソンは赤の代弁者(1950年12月27日)

ワシントン政界のスッパ抜きをやるので有名なドリュー・ピアソンは*、アダマス帽子店の後援で

日曜毎に放送をしているが、来年2月18日に現在の契約が切れるのを機会に、契約が更新されないむね帽子会社から通告をうけた。

事件はピアソンと例のマッカーシー上院議員との争いから、マッカーシーはピアソンを「赤の代弁者」と呼ばわり、そんな男の放送をスポンサーするアダムス・ハットをボイコットしろ、と云ったので、神経過敏になっているアメリカ人からさまざまな抗議が同店に舞いこむ始末で、同店ではあわてて契約を更新しないことにしたのである。

ピアソンは、マッカーシーがだれかれの見さかしくなく無根拠に他人を赤呼ばわりすることを非難し、所得税の申告をごま化さないようにと冷やかしたのであった**。ピアソンの赤嫌いは有名で、その放送ではいつもロシアの悪口をいっていたが、その人さえ今では赤といわれるようになって来たわけである。

* ピアソンは例のラティモア事件でラティモアを熱烈に弁護し、「私はたまたまオーウェン・ラティモアを個人的に知っていますが、わが国がかれのような愛国者をもっとたくさんもっていたならと思うのは、私だけでしょうか」と放送して、マッカーシーからいらまれたものである。

** マッカーシーは、4万2千ドルの所得税の申告漏れをやって、摘発されたことがある。(139-140頁)

その2. 太平洋問題調査会、マッカーシー旋風にまきこまれる (1951年2月24日)

蒋介石援助に躍起となっているアメリカ議会の一派は、蔣援助に反対する者に共産主義のレッテルを貼ろうとしているが、最近ではその攻撃の鋒先を太平洋問題調査会に向けている。同調査会は、アジア問題研究者たちによって組織される民間団体であるが、従来、蔣援助に反対する立場をとってきた。

マッカーシー上院議員の入れ智慧で、下院非米活動調査委は、太平洋問題調査会の事務総長ウィリアム・ホランドの住宅を襲って多数の文書を押収したが、そのなかに同会がモスクワから2,500弗もらった証拠があると云っている。

これにたいしてホランドは、その金はソ連太平洋問題調査会が同会の会員であった時代の会費だろう、言っている。

議会右翼派が押収した文書のなかから、次の点が明らかとなった。

- 1 アメレジア事件 (1945年、政府の秘密文書を盗んだというので騒がれた事件) に関係していた者が同調査会にも関係している。
- 2 共産党との関係を議会委員会で問われて返答を拒絶したフレデリック・フィールドとのあいだに、たくさんの文通が行われている。
- 3 ラティモアおよびジェサップとのあいだにも文通がしきりであった。

ラティモアはジョンズ・ホプキンス大学教授で、有数の東洋通であり、中国語や蒙古語を自由に話す人、マッカーシーから共産主義の元凶と言われた。ジェサップは國務省の特別大使でコロンビア大学の国際法教授で、マッカーシーから共産主義の同調者と言われた。

* 太平洋問題調査会の文書のなかから、ラティモア、ジェサップ、フィールドの手紙が多数発見されたのは、奇異とするに足りない。ジェサップもラティモアもかつて調査会の要職にあったし、フィールドも調査会の役員として、ラティモアの下で働いていたことがあるからである。(131-132頁)

その3. フィールドの保釈金1万ドル（1951年7月11日）

アメリカ共産党指導者の4人は、下獄のため連邦裁判所に出頭する日になっても姿をあらわさなかったために、かれらの保釈積立金8万ドル（1人2万ドル）が政府に押収されたことは既報の通りである。

このアメリカ共産党指導者の保釈金を積んだのは、民権擁護協議会と称する団体であるが、司法省では同会への寄付者名簿を調査すれば雲隠れした共産党員の所在が判明すると考えて、同会の書記フレデリック・フィールド*と理事の1人アブナー・グリーンを召喚した。しかし、フィールドは、同会への寄付名簿を法廷に提出することは自分を罪におとし入れる可能性があると主張して、あくまでも判事の要求を拒絶したので、法廷侮辱罪に問われて90日の体刑を宣告された。フィールドは一夜を獄舎ですごしただけで、翌日は1万ドルの保釈金で自由の身となった。

フィールドは、ニューヨーク市を建設するのに大きな働きをして莫大な金を儲けたコーネリウス・ヴァンダービルトの曾孫で、かれ自身も百万長者であるが、かねてから左翼思想の支持者として知られている。

* なお、フレデリック・フィールドは、ラティモア事件の証人としてもラティモアを弁護して重要な役割を演じ、一時は太平洋問題調査会の研究者として活躍したこともあり、すぐれた進歩的アジア研究者として知られている。(43-44頁)

その4. ラティモア証言台に（1951年8月4日）

マッカーシー上院議員から国務省内の元凶とかソ連のスパイと呼ばれ、タイディングス委員会で調査されたがその証拠なしと云われたアジア問題の権威者オーウェン・ラティモア教授は、いままた問題をむし返されている。

今度の調査はネバダのマッカラン上院議員を委員長とする国防安全保障委員会で、同委員会は、いま、アメリカの極東政策に「陰謀的勢力」の影響がありはしなかったかと太平洋問題調査会の調査に取りかかっているのである。

この調査会に呼び出されたのが、かつてソ連赤軍のインテリジェンス部の指導者であったと自称するアレキサンダー・バーミンで、かれは1937年にソ連を逃亡し、1942年に帰化し、現在は国務省のラジオ宣伝「アメリカの声」のロシア部長である。

このバーミン少将によれば、1930年代にラティモアはソ連のスパイとして働いたことがあり、かれの友人で『ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン』の記者をしていたジョー・バーンズもそうであった。バーミンは、このことについて数年前にFBIに報告したことがあると云い、さらに太平洋問題調査会もソ連の手先であると証言した。

マッカラン委員会にとって、これほどありがたい証言はなかった。何しろ欲しくてたまらなかった証言を手に入れたのだから。

ただバーミンの証言は、バーミン自身がラティモアと会ったこともないし、ただ上役からラティモアがソ連の手先であると聞いた、と云うだけなのだから、アヤフヤなものであるが、マッカランはそんな点は意に介せず、いよいよラティモアを絞め上げる肚でいる。

この報告を聞いたラティモア氏は

冗談も休み休み云え、

と意に介しないし、バーンズも
共産党の脱落者や虚言が欲しくてたまらない政治家は、共産主義者と同じように始末におえぬ代物
だ、
と云っている。(141-143 頁)

その 5. 朝鮮戦争がおこったのは、ロックフェラー財団のせい (1951 年 8 月 8 日)

アメリカ議会における右翼派議員の赤狩りはいよいよ気狂いじみてきた。太平洋問題調査会がソ連の手先として槍玉にあがっているが、今度はロックフェラー財団とかカーネギー財団とかのように文化奨励に莫大な経済的援助をしてきた団体が、陰謀的人物を養成するものとして攻撃の火をあびている。

免税の特典を有するこれらの文化団体の取調べを要求する決議を出して、大演説をしたのは、ジョージア州のカックス (民) で、氏はとくにロックフェラー、カーネギー、ローゼンワルド、スロアン及びロバート・マーシャルの諸財団が共産党とその活動に財政的援助をした、と述べている。そしてカックスが証拠としてあげたのは、これらの財団からオーウェン・ラティモア教授や、作曲家として聞こえたハンス・アイスラーや、評論家ルイス・アダミックスや、黒人詩人ラングストン・ヒューズが奨学金を授与されたことである。

カックスが演説したと同じ日に、共和党のベルデ (イリノイ出身) は、ラティモアと共同してソ連のスパイをやったと云われるジョゼフ・バーンズを槍玉にあげた。バーンズは、現在はニューヨークの出版社サイモン・シャスター社の記者であるが、同社が出版した『赤い中国の横顔』という本が中共を弁護したものだということである。

バーンズがこんな本を出版する会社の記者に雇われているのは、驚くべき偶然の一致だということである。

カックスがとくに攻撃したのはロックフェラー財団で、同財団は過去 32 年間に 4200 万ドルを中国に使用したが、その金が中国の知識階級を共産主義に向かわせるように費やされたために、今日アメリカ青年は朝鮮で死んでいるのだそうである。(133-134 頁)

その 6. あばれるマッカーシー (1951 年 8 月 15 日)

マッカーシー上院議員は去る 9 日の上院本会議で、国務省特使ジェサップ博士をはじめとして 25 人の役人の忠誠を調査中であると述べ、その氏名を発表して新たな問題を起こした。マッカーシーによれば、ジェサップは少なくとも 5 つの共産党の外郭団体に関係していた。今度その名をあげられた人々は、主として無名人であるが、ジェサップについて前スイス公使ジョン・ヴィセントの名も指摘された。

マッカーシーはかねてから、国務省内で忠誠に疑いある者の名を暴露すると嚇していたが、いよいよそのために登壇したわけである。これについてマクファーランド上院議員は顔を真っ赤にして怒った。

他人の悪口を云うのは上院の権威に関する。十分な証拠なくして個人を不忠誠呼ばわりするのは、上院の権威を傷つけるものだ。

ニューヨークのレーマン上院議員は、マッカーシーの行動は理由なくして人間を殺すものだと抗議し、ジェサップはすぐれたアメリカ人であって、その忠誠に疑うべき点はない、と述べている。

同時に、国務省でも声明書を発表し、そのなかでマッカーシーは「脅迫からの自由」という基本的人権を侵害していると非難し、同上院議員の言動がいかに無責任であるかについて、次のように指摘した。

マッカーシーは、アチソン自身も知っている共産主義者が国務省内に 205 人いると云ったが、次いでこれを 57 人と云い、その舌の根のかわかぬうちに 81 人どうそぶいた。ところが近頃では、必ずしも共産党員の党員章はもっていないが国防安全に危険な者が 29 人いると云い、その結果が今度の「暴露」で、暴露されたのは 26 人だった。(130-131 頁)

その 7. 出るも入るも不自由な日本 (1951 年 9 月 8 日)

ハーヴァード大学教授で中国史の世界的権威といわれているジョン・キング・フェアバンク博士は、ハーヴァードから 1 ヵ年の休暇をえて日本の大学で近代中国史を講義するはずであったが、占領軍司令部は入国許可書の下付を拒否した。

フェアバンク博士は旅券申請と同時に家族を伴いサンフランシスコに出発し、同地に到着するまでに旅券は下付されるものと信じていた。

ところが国務省から、旅券下付前に軍部から入国許可書を受けねばならぬと通告してきたので、その手続きをとると、日本入国はまかりならぬ、との宣告であった。

同博士は太平洋問題調査会の理事であり、1948 年に出版した『アメリカと中国』という書物は、その道の権威書と云われている。同教授はかねてから国民党中国に愛想をつかしていたので、おそらくこれが軍部のご機嫌をそこねて日本入国を拒否されたのだらうと云われている。(86-87 頁)

その 8. 未来の国務長官も赤だ (1951 年 12 月 19 日)

国務省赤狩りの張本人マッカーシー議員の槍玉にあがっていた外交官ジョン・サーヴィス氏は、ついに国務省から罷免された。同省の忠誠再審局が、サーヴィスの忠誠には「もっともと思われる疑いあり」という判決を下したのである。しかし同局は、サーヴィスが実際に不忠誠であったとかあるとかいう事実はないということを強調した。

サーヴィスが問題になったのは、6 年来のことで、アジア問題の専門雑誌『アメリジア』に国務省の秘密文書を提供した 1 人と云われたが、陪審裁判の結果、無罪となり、国務省に復帰していた。

サーヴィスはさらに、国務省忠誠調査局からもその忠誠に疑いなしと云われたが、昨年度トルーマン氏の命令で文官登用令にもとづいて作られた忠誠再審局は、別個の解釈を採り、今回の罷免措置となったが、新法令の下では「もっともと思われる疑い」というように変更された。そしてサーヴィスのような地位にある者は、親友に対してでも国務省その他の文書を見せるのを控えるのが当然で、そのような行為をとったかれを忠誠に疑いなしというのは、寛大に過ぎるという解釈を下したのである。

忠誠再審局の判決と罷免の通告を受けたサーヴィスは「これは衝動であり、驚きであり、不正である」と云い、

私は過去においても、現在においても、不忠誠であったことはない。

と声明した。特に、忠誠再審局が6年前に起きた『アメレジア事件』を唯一の基礎としたことを非難し、この事件はすでに万人周知のことであり、これについては9回も取調べられ、毎回無罪を宣告されている、と云っている。さらにサーヴィスは、自分が『アメレジア』に提供した材料は、一般的なバックグラウンドとなる資料だけだったことを指摘している。

* ジョン・S・サーヴィス氏は、スチルウェル将軍の特別顧問として中国に派遣され、その後カルカット領事をもつとめて、アルガー・ヒスと共に未来の国務長官と云われた逸材であるが、国民党に見切りをつけるように早くから本国に進言していたために、マッカーシー旋風にまきこまれたと云われている。(34-35頁)

その9. ラティモアふたたび立つ (1952年3月1日)

ジョンズ・ホプキンス大学の教授でアジア問題の専門家であるオーウェン・ラティモア教授は、今回は国家安全保障委に召喚されて取調べを受けている。(前回はタイディングス上院外交委員会)。同教授は国務省内の赤の元凶と云われたり、蒋介石売り渡し政策の樹立者である、と非難されていた。

証言に出席するにあたって同教授は、1万7500語からなる声明書を持参したが、質問攻めでその一部しか読むことができなかった。しかし委員会が「真赤な嘘と取りとめのない噂話」をふりまくことを非難し、「こんな委員会に公平に事実を評価することができるわけではない」と責めることに成功した。かれを共産主義者だと非難したのは、例のマッカーシーであるが、ラティモアはこれを徹底的に否認した。

ラティモアは弁護士エーブ・フォータス(前内務次官補)に同伴されたが、かれは発言を許されなかった。

フォータス弁護士も、ラティモアを助けることを許されなかったのは不都合だと抗議した。(143-144頁)

その10. 太平洋問題調査会、むしかえし攻撃にさらされる (日付ナシ)

上院国内安全保障委員会(マッカラン委員会)は、かねて紛争の種となってきた太平洋問題調査会の調査に着手し、事務総長カーターと、かつての理事であり左翼運動のパトロンと云われるフレデリック・フィールドのふたりを、まず召喚した。

調査の種となるのは、前国務省高官アルジャー・ヒスとカーターとのあいだにかわされた手紙にあるものようで、約30人の証人をよんで6週間がかりで調べる、と委員会では云っている。

太平洋問題調査会は、各国に独立の研究所をもったものの一部で、アメリカでも有名な人々がその理事である。例のマッカーシー上院議員は、同会を共産党の「フロント」と呼んでいたが、じっさいには、同会が蒋介石に好意をもたなかったところから、この非難をあびせられたのである。

国内安全保障委員会では、オーウェン・ラティモアら呼んでひそかに同会を調査中であったが、いよいよその公聴会をひらくことになったのである。(145-146頁)

2. 陸井三郎について

上記の『ヒステリー・エージ』を編集した陸井三郎がどんな人物であるかについて興味を持って調べていると、次のようなことが起こった。

昨日の2010年8月28日に、研究室の掃除を12年ぶりにしていると、その中から、『陸井三郎先生に聞く』という、東京大学アメリカ研究資料センターが1991年に発行したパンフレットが出て来た。この冊子は、「オーラル・ヒストリー・シリーズ」の第27番目のもので、第6番目には『高木八尺先生に聞く』や、第9番目には『松本重治先生に聞く』がある。この2人は、太平洋問題調査会の関係者なので、寄贈をして頂いた理由は分かるが、当時（1990年代）の時点で、なぜ陸井三郎の冊子が含まれていたかは不明である。しかし、現在のマッカーシズムと太平洋問題調査会の消滅との関係を研究している私にとっては、大変貴重な資料である。

この冊子の内容を読むと、太平洋問題調査会と関係のある事柄がいくつか出ている。陸井自身は、太平洋問題調査会と関係が非常に深く、鶴見裕輔（1885-1973）が実質的に運営していた太平洋協会に1942年6月に就職するが、ここで、第1次日米交換船で1942年9月に米国から戻ってきた都留重人（1912-2006）、鶴見和子（1918-2006）、坂西志保（1896-1976）、武田清子（1917-）、松岡洋子（1932-1979）といった知米派知識人と知り合った。これらの人々は、戦後期に再建された日本太平洋問題調査会のメンバーでもある（2010年8月29日記）。

この冊子の中に、太平洋問題調査会という言葉は1回だけ出てくるので、その箇所を転記しておく⁶。

誤解はないと思いますが、太平洋協会は、太平洋問題調査会（IPR）の支部では全くなくて、IPRの日本セッションは、当時から銀座に事務所があるんです。何か会議があったときだけそれを組織するのであって、IPRそのものの研究機関は日本にはないわけです。大学の人などが、いろいろな人を連れてきて、そこで会議をやるということで、実際にはIPRはなかったわけです。

今回、「陸井三郎」のテーマで、インターネット検索をしたら、本年（2012年）9月に、「陸井三郎」の名前でウィキペディア上に記事が掲載されていた⁷。ここでは、経歴に関しては非常に簡単ではあるが、彼の業績（単著、共著、共編著、共訳書）一覧表があるので、彼の活動を知る上で便利である。単著の1番最初の書籍は、拙論の第1章で取り上げた1952年出版の『ヒステリー・エージ』であり、1990年には、単著として最後である『ハリウッドとマッカーシズム』を筑摩書房から出版している。時期的に最初の出版は、1948年の共著である『アメリカの新アジア観』（中国研究所編、潮流社、1948年）である。この中には、陸井が執筆した「アメリカに於ける東亜研究者の系譜」（165-208頁）という論考があるので、太平洋問題調査会の関係者も、名前が多く挙げられているので、参考資料として巻末に載せたいと思ったが、紙幅の関係で割愛した。

また訳書の中には、太平洋問題調査会関係者の、①ハーバート・E・ノーマン（1909-1957）の『日本における兵士と農民』（白日書院、1947年）と、②オーウェン・ラティモア（1900-1989）の『アメリカの審判』（みすず書房、1951年）がある。

3. 太平洋問題調査会と関連したマッカーシズム関係の書籍と論文

これまで私は、マッカーシズムと太平洋問題調査会の関連性について、2つの研究ノートを執筆し、また、太平洋問題調査会関係者が関連したスパイ事件について、簡単なエッセイを書いた⁸。その中では、私の関心が、太平洋問題調査会の発足時から終焉時に移行して行った経緯が書かれており、研究的な内容であった。それに対して、先に述べたように、佐々木豊教授は、マッカーシズム時の太平洋問題調査会の活動を直接捉え、分析対象としている⁹。また、福井義高教授（青山学院大学院国際マネジメント研究科）は、近年注目を浴びている「ヴェノナ（ソ連暗号解読プロジェクト）」に関して、2011年12月3日に開催された太平洋問題調査会（IPR）研究会第4回研究例会（開催場所は、早稲田大学アジア太平洋研究科会議室）において、「『赤狩り』再評価——ヴェノナとクレムリン秘密文書」というテーマで講演をして頂いたが、福井教授は、論文数が少ないヴェノナに関して先駆的な論文を書いている¹⁰。

次に、太平洋問題調査会とマッカーシズムとの関係を研究するのに必要な文献を検討すると、以下の通りである。日本では、マッカーシズムそのものに対する論文もそれほど多くなく、また、書籍も同様に数は少ない。そこで、下記に挙げた書籍が、基本的なものとなると思われる。

重要図書

- (01) *US Congress, Senate, Committee on the Judiciary, Internal Security Subcommittee, Institute of Pacific Relations: Hearings before the Subcommittee to Investigate the Administration of the Internal Security Act, 82nd Congress, US Government Printing, 1952*
- (02) *The Institute of Pacific Relations: Asian Scholars and American Politics*, John N. Thomas, University of Washington Press, 1974
- (03) *Remembering the Institute of Pacific Relations: The Memoirs of William L. Holland*, Paul F. Hooper (ed), Ryukei Shyosha, 1995
- (04) *Blacklisted by History, The Untold Story of Senator Joe McCarthy and his Fight against American's Enemies*, M. Stanton Evans, Crown Forum, 2007

基本文献

- (05) 『マッカーシズム』 R・H・ロービア，宮地健次郎訳，岩波書店，1984年1月 *Senator Joe McCarthy*, Richard H. Rovere, Methuen, 1959
- (06) 『リベラルたちの背信——アメリカを誤らせた民主党の60年』 アン・コールター，栗原百代訳，草思社，2004年9月 (*Treason: Liberal Treachery from the Cold War to the War on Terrorism*, Ann Coulter, Three Rivers Press, 2003)
- (07) 『共産中国はアメリカがつくった』 ジョセフ・マッカーシー，木原俊裕訳，副島隆彦監修・解説，2005年12月 (*American's Retreat from Victory: The Story of George Catlett Marshall*, Joseph R. McCarthy, Devin-Adair, 1954)
- (08) 『ヴェノナ——解読されたソ連の暗号とスパイ活動』 ジョン・アール・ヘインズ & ハーベイ・クレア，中西輝政監訳，PHP研究所，2010年2月 (*Venona: Decoding Soviet Espionage in America*, John Earl Hynes & Harvey Klehr, Yale University Press, 1999)

関連図書

- (09) 『億万長者はハリウッドを殺す（上）（下）』 広瀬隆，講談社，1986年4月
- (10) 『ハリウッドとマッカーシズム』 陸井三郎，筑摩書房，1990年10月
- (11) 『レッドパージ・ハリウッド——赤狩り体制に挑んだブラックリスト映画人列伝』 上島春彦，作品社，2006年7月
- (12) 『マリリン・モンローはなぜ神話となったのか——マッカーシズムと1950年代アメリカ映画』 福井次郎，言視舎，2012年06月
- (13) 『ウィロビー報告——赤色スパイ団の全容，ゾルゲ事件』 C・A・ウィロビー，福田太郎訳，東西南北社，1953年4月 (*Shanghai Conspiracy: The Sorge Spy Ring, Moscow, Shanghai, Tokyo, San Francisco, New York, Charles A. Willoughby, 1950*)
- (14) 『アメリカ逆コース』 I・F・ストーン，内山敏訳，新評論社，1953年8月 (*The Truman Era, Isador Feinstein Stone, Monthly Review Press, 1953*)
- (15) 『マッカーシー時代を生きた人たち——忠誠審査・父と母・ユダヤ人』，カール・バーンスタイン，奥平康弘訳，日本評論社，1992年3月 (*Loyalties: A Son's Memoir, Carl Bernstein, Simon & Schuster, 1989*)
- (16) 『赤狩り時代の米国大学——遅すぎた名誉回復』 中公新書 1194，黒田修司，中央公社，1994年7月
- (17) 『闇の王子ディズニー（上）（下）』 マーク・エリオット，古賀林幸訳，草思社，1994年10月 (*Walt Disney: Hollywood's Dark Prince, Birch Lane Press, 1994*)
- (18) 『国防長官はなぜ死んだか——フォレストル怪死と戦後体制の大虚構』 コーネル・シンプソン，佐々木槇訳，大田龍監修・解説，成甲書房，2005年12月 (*The Death of James Forrestal, Cornell Simpson, Western Islands Publishers, 1966*)
- (19) 『ハリウッドの密告者——1950年代アメリカの異端審問』 ヴィクター・ナヴァスキー，三宅義子訳，論創社，2008年7月 (*Naming Names, Victor S. Navasky, Viking Press, 1980*)

おわりに

本稿の執筆時点（2012年10月）で、「マッカーシズム」というキーワードでコンピュータ検索を実施した結果，前章で挙げた関連図書の第12番目の『マリリン・モンローはなぜ神話となったのか——マッカーシズムと1950年代アメリカ映画』が出版されていることが分かり，早速，本屋へ注文をした。同書は，本年（2012年）6月の出版なので，最近のことである。

このように，日本においては，マッカーシズム研究の書籍や論文では，ハリウッド映画（ハリウッド・テンやブラックリスト）との関連性で捉えられることが多い。陸井三郎の1990年出版の『ハリウッドとマッカーシズム』を初めとして，2000年の『レッドパージ・ハリウッド』，翻訳本であるが，2008年出版の『ハリウッドの密告者』，また先に述べた本年出版の『マリリン・モンローはなぜ神話となったのか』といったように，一連の書籍が日本で出版されている。

本稿では，太平洋問題調査会とマッカーシズムとの関連性を検討する場合の基礎作業として，まず，1950年代当時の米国でのマッカーシズムの状況を明らかにするために，新聞記事から取られた資料

を元に、マッカーシズム期の太平洋問題調査会関係者が新聞記事でどのように取り上げられていたかを見た。そこには、太平洋問題調査会関係者のオーウェン・ラティモア、ウィリアム・ホランド、フレデリック・フィールド、フィリップ・ジェサップ、ジョセフ・バーズ、ジョン・フェアバンク、ジョン・サービスという名前が挙げられていた。

次に、マッカーシズムを研究対象として論文・書籍を出版した陸井三郎に関しても触れた。それは、彼が、日本においてマッカーシズム研究の第一人者であったことと、彼の編集・出版した書籍の中に、先の新聞記事が載っていたからである。また陸井は、日本太平洋問題調査会の関係者（鶴見裕輔、都留重人、松岡洋子）とも密接な関係があったことも分かった。

最後に、陸井の書籍も含めて、マッカーシズムに直接関連して、どのような書籍が日本で出版されているのかを紹介した。その結果、日本におけるマッカーシズムに関する書籍は、数量的にはそれほど多くはなく、そのテーマも、1940年代後半のハリウッドでの赤狩り関係のものが主であることが分かった。また、直接的に太平洋問題調査会との関係で、マッカーシズムを研究するために必要となる関連書籍についても検討した。それらは、冊数は少ないが、太平洋問題調査会の崩壊過程を検討しようとした研究であり、最近明らかとなった「ヴェノナ・プロジェクト（旧ソ連のKGBが使用した暗号の解読作戦の名称）」との関係でも、単なる過去の出来事ではなく、現代的な、歴史の見直しにもつながる可能性のある研究課題である。

今後の研究方向としては、第1に、日本において、マッカーシズムを肯定的に捕らえ、マッカーシー側に立った論壇での流れもあるので、この点に関して検討することと、第2点として、前章の重要図書で第1番目に挙げられている、太平洋問題調査会を取り扱った米国議会での議事録（15冊）を基礎データとして、マッカーラン委員会での審議内容を検討することで、マッカーシズムと太平洋問題調査会との関係を明確にしていくことの2点が、今後の課題として残されている。

註

¹ 同研究所は、2011年3月31日に解散しているが、その活動やメンバーに関しては、次のHPを見よ。

http://www.kikou.waseda.ac.jp/WSD322_open.php?KikoId=01&Kenkyujold=R7&kbn=0.

² 山岡道男、ポール・フーパー、片桐庸夫、佐々木豊『早稲田大学太平洋問題調査会研究所主催国際シンポジウム：マッカーシズムと太平洋問題調査会』、早稲田大学太平洋問題調査会研究所、2011年3月。

³ 国際シンポジウムのプログラムは、次の通りである。

早稲田大学太平洋問題調査会（IPR）研究所 第3回研究例会（国際シンポジウム）プログラム

開催日：2010年12月04日（土）午後2-5時

開催場所：早稲田大学大学院アジア太平洋研究科会議室西早稲田ビル7階713室

日 程：（逐次通訳：山本英嗣・早稲田大学アジア太平洋研究科助手）

報告者1：山岡道男（早稲田大学アジア太平洋研究科教授）

テーマ：日本におけるマッカーシズム研究とマッカーシズム期のIPR研究

コメンテータ：片桐庸夫（群馬県立女子大学国際コミュニケーション学部教授）

報告者2：ポール・フーパー（ハワイ大学アメリカ研究科名誉教授）

テーマ：マッカーシズムとIPR研究の現状（McCarthyism and Contemporary IPR Research）

コメンテータ：佐々木豊（相愛大学人文学部現代デザイン学科教授）

⁴ 『ヒステリー・エージ：シカゴ新報1949-1952より』、シカゴ新報・陸井三郎編、月曜書房、1952年。転記に際して、読みやすさを考慮して、旧漢字を新漢字に変更したり、また太平洋問題調査会の箇所を黒枠で囲ったりなどした。

⁵ 『陸井三郎先生に聞く（American Studies in Japan Oral History Series Vol. 27）』東京大学アメリカ研究資料センター、1991年7月14日、聞き手（河村望、油井大三郎、上杉忍）。

⁶ 前掲書、「3. 太平洋協会をめぐる」、12-13頁。

⁷ 陸井三郎に関するウィキペディアでの URL は、下記の通りである。また、その中に載せてある経歴は、次の通りである。東京出身。1940 年、青山学院（のちの青山学院大学）高等商学部を卒業。第 2 次世界大戦中は太平洋協会、戦後は世界経済研究所に勤務し、アメリカ研究所長（1966 年–1973 年）、アジア・アフリカ研究所員（1961 年–2000 年）、「ベトナムにおける戦争犯罪調査日本委員会」事務局長（1966 年–1975 年）を歴任した。1967 年、ベトナム戦争における米国の戦争犯罪を裁く民衆法廷「国際戦争犯罪法廷」（ラッセル法廷）に参加し、調査や証言を行った。2000 年 1 月 13 日未明、心不全で死去。81 歳。

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%99%B8%E4%BA%95%E4%B8%89%E9%83%8E>

- ⁸ ①「太平洋問題調査会（IPR）とマッカーシズム」『アジア文化』、アジア文化総合研究所出版会、第 28 号、99–108 頁、2006 年 4 月。②「グンター・シュタイン（ガンサー・スタイン、Guenther Stein）について：太平洋問題調査会とマッカーシズムとの関係」『アジア文化』第 29 号、アジア文化総合研究所出版会、2007 年 10 月、44–49 頁。③「太平洋問題調査会（IPR）関連のスパイ事件」『世界と議会』尾崎行雄記念財団、第 477 号、28–29 頁、2004 年 2 月。
- ⁹ ①「太平洋問題調査会とアメリカ知識人—『調査シリーズ』の『非党派的客観性』を巡る論争（1937–1939）を中心に」『アメリカ研究』第 29 号、アメリカ学会、1995 年 3 月、197–215 頁。②「アメリカ“赤狩り”時代の極東問題専門家—『学術的客観性』の理念をめぐる論争を中心に（上）」、『史学』第 67 巻第 1 号、慶応義塾大学、1997 年 9 月、131–159 頁。③「アメリカ“赤狩り”時代の極東問題専門家—『学術的客観性』の理念をめぐる論争を中心に（下）」、『史学』第 67 巻第 2 号、慶応義塾大学、1998 年 3 月、57–81 頁。④「ロックフェラー財団と太平洋問題調査会—冷戦初期の巨大財閥と民間研究団体の協力・緊張関係」『アメリカ研究』第 37 号、アメリカ学会、2003 年 3 月、157–175 頁。⑤「太平洋問題調査会と第二トラック外交」『研究論集』第 22 巻、相愛大学、2006 年 3 月、109–140 頁。⑥「“赤狩り”時代のエドワード・C・カーター（元 IPR 事務総長）の言動に関する一考察」『太平洋問題調査会（1925–1961）とその時代』、春風社、2010 年 3 月、161–192 頁。⑦「“赤狩り”時代の議会調査委員会とカーネギー財団—『アメリカ的伝統』を巡る論争」『現代アメリカの政治文化と世界：20 世紀初頭から現代まで』2010 年 10 月、昭和堂、135–159 頁。
- ¹⁰ ①「東京裁判史観を痛打する『ヴェノナ』のインパクト—ソ連・アメリカ共産党の諜報工作と第 2 次大戦」『正論』5 月号（通巻 410 号）、産経新聞社、2006 年、88–99 頁。②「ヴェノナと昭和史再検討」戦後日本研究会・近代日本史料研究会：報告集 3、近代日本史料研究会、2007 年 12 月、3–26 頁。③「ヴェノナと現代史再検討」報告用レジメ（2011 年 12 月 3 日版、同年 12 月 5 日加筆版）、太平洋問題調査会（IPR）研究会第 4 回研究例会（2011 年 12 月 3 日開催）、テーマ—「『赤狩り』再評価：ヴェノナとクレムリン秘密文書」、早稲田大学アジア太平洋研究センター。